WSIS+20 High-Level Event 2025及び AI for Good Global Summitの結果概要

総務省　国際戦略局 国際戦略課 国際機関室　小熊（おぐま）　優太（ゆうた）

ー概要ー

WSIS（World Summit on the Information Society：世界情報社会サミット）フォーラムは、2003年及び2005年に策定したWSISアクションラインの進捗報告・情報交換を目的として、2009年から毎年開催しているフォーラムである。このフォーラムには各国政府・国連機関に加え、民間企業や市民団体など、あらゆるステークホルダーが参加可能となっている。本年のWSISフォーラムは「WSIS+20 High-Level Event 2025」と称して、ITU（国際電気通信連合）とスイス連邦が共同主催し、UNESCO（国連教育科学文化機関）、UNDP（国連開発計画）、UNCTAD（国連貿易開発会議）が共催する形で、2025年7月7日から11日まで、ジュネーブのPalexpo（国際展示場）で開催された。59名の大臣及び副大臣、56名の規制当局リーダー、60名以上の国連関係者に加え、企業のCEO、市民社会のリーダー、若年層、技術専門家、学術関係者など、多様なステークホルダーが一堂に会し、約250のセッションに参加した。本フォーラムの成果は、2025年12月にニューヨークの国連総会で行われる「WSIS+20全体レビュー」に反映される予定である。

また、今般、2025年7月8日から11日の日程でAI for Good Global Summitが同会場において並行して開催された。AI for Goodは、ITUが他の国際機関との協力の下、推進する国連のプラットフォームである。AI の開発者及び利用者が学習・議論・協働を通じて、SDGsを前進させるための実用的なAIソリューションを特定することを目的として、日本の尾上誠蔵氏が局長を務めるITU電気通信標準化局が主導している活動であり、年1回開催されるGlobal SummitはAI関連企業、政府、国際機関等が集い、セッションやAI技術の展示が行われるフォーラムである。

両イベント合計で、169か国から11,000人を超える参加者が参加した。

これらの2つのフォーラムにおいて、日本からハイレベルセッションに参加し議論に貢献したところ、概要を以下に報告する。総務省からは今川総務審議官、国際戦略局国際戦略課国際機関室 長屋室長、小熊主査が参加した。

1. WSIS+20 High-Level Event 2025

1.1　閣僚級ラウンドテーブル

各国政府の閣僚級レベルのみが参加できる非公開のラウンドテーブルが開催された。56名の情報通信主管庁の大臣、副大臣級に加え、ITU事務総局長・次長、無線通信局長、電気通信標準化局長、電気通信開発局長等が参加。参加者がブレイクアウトルームに分かれて、3つのテーマ「国家のデジタル優先事項とその実施に必要な支援」、「AI、5G、宇宙技術などの新たなデジタル動向」、「2025年以降のWSISの将来」の意見交換を行った後、最後のプレナリーセッションで各ブレイクアウトルームの総括が行われた。

我が国からは今川総務審議官がWSISの継続及びマルチステークホルダーアプローチの重要性、日本の取組み、Internet Governance Forumの取組み等について発言した。議論の成果として、WSISが包摂的なデジタル開発のためのプラットフォームとして今なお重要であること、また、多様なステークホルダーの参画、国際的な連帯、そしてグローバルな協力が、デジタル格差の是正、新技術の活用、そしてすべての人々のための持続可能なデジタル未来の構築に不可欠であることが強調された。

■図1.　閣僚級ラウンドテーブル参加者

1.2　WSISにおける日本のスポンサーシップ

我が国は、WSISフォーラムに対して毎年スポンサーシップを提供しており、本年も継続して支援活動を実施した。フォーラム3日目にあたる7月9日には、日本政府主催によるコーヒーブレイクが開催され、ITU電気通信標準化局の尾上局長及び今川総務審議官がスピーチを行った。

尾上局長は、2026年11月にカタール・ドーハで開催予定のITU全権委員会議において、電気通信標準化局長としての2期目（2027年～2030年）への立候補を表明している。これを受け、今川総務審議官はスピーチの中で、尾上局長のこれまでのリーダーシップと国際的な貢献を強調するとともに、日本政府として各国からの継続的な支援をお願いした。

また、フォーラム4日目（7月10日）の夜には、スイス政府及びITUによる公式レセプションが開催され、WSISの長年のパートナーとしての貢献が評価された。我が国は、UAE（長年のパートナー）、マレーシア（プラチナパートナー）、サウジアラビア及び南アフリカ（ゴールドパートナー）と並び、シルバーパートナーとして、ITUのボグダン＝マーティン事務総局長より表彰状を授与された。

1.3　ハイレベル代表者への独占ビデオインタビュー

WSISフォーラムにおいては、各国のハイレベル代表者を対象とした独占ビデオインタビューが実施された。我が国からは、今川総務審議官がインタビューに応じ、日本の情報社会に関する取組みや国際的な連携の重要性について見解を述べた。インタビュー映像はYouTubeのITU公式チャンネルにて公開されており、一般に視聴可能である（https://www.youtube.com/watch?v=IeRb-vj5JWU）。

インタビューでは、WSISの枠組みに基づき、日本がこれまで取り組んできた施策や成果について問われ、今川総務審議官は、日本がWSISの理念を受入れ、特に災害対応及びデジタルインフラの整備に重点を置いてきたことを説明した。自然災害の多い国として、日本はICTを活用した災害対応モデルを構築しており、緊急地震速報、AIによる被害予測、ドローンによる被災地調査、衛星ネットワークを活用した緊急警報システムなどの具体例を挙げて紹介した。これらの取組みは、WSISアクションラインC7（ICTアプリケーション：e-環境）に該当するものである。また、アクションラインC2（情報通信インフラ）に沿った施策として、日本は国内ほぼ全域に高速通信ネットワークを整備し、都市と地方のデジタル格差の是正に努めている点にも言及した。これらの取組みは、国内のレジリエンス（回復力）を強化するのみならず、国際的に共有可能なベストプラクティスとしても機能している。

インタビューの中では、WSIS+20 High-Level Event 2025及びAI for Good Global Summitにおいて、特に印象に残ったイベントについての質問もあり、今川総務審議官は「Robotics for Good Youth Challenge Grand Finale」を挙げた。この国際的なコンペティションについては本稿後半で詳述するが、若年層がAIやロボティクスを活用して社会課題の解決に取り組むことを促進するものである。今川総務審議官は、参加した若者たちの創造性、技術力、そして社会貢献への意欲に深く感銘を受けたと述べるとともに、このような取組みが次世代の人材育成のみならず、国際協力の促進にも資する非常に意義深いものであり、「AI for Good」の理念を体現するものであると強調した。

2.　AI for Good Global Summit

2.1　AI Skills Coalition パートナーズランチ

AI Skills Coalitionは、「AI for Good」イニシアチブの一環として設立された、グローバルかつオープンで信頼性の高いAI教育・能力開発のためのプラットフォームである。本プラットフォームは、AIスキルの普及と格差是正を目的とし、世界中の人々がAIの基礎から応用までを学べるよう、無料または低価格で質の高いオンラインコース、ワークショップ、教材を提供している（https://aiforgood.itu.int/ai-skills-coalition/）。対象は子どもから専門家まで幅広く、AI倫理、医療、教育、公共政策、環境、国際貿易など多様な分野に対応したコースが展開されている。日本政府は本プラットフォームに対し、拠出金を通じた支援を行っている。

AI for Good Global Summitの一環として7月9日に開催された「AI Skills Coalition Partners Lunch」では、各国政府、国際機関、企業、学術界などからハイレベルな代表者が一堂に会し、AIスキルの向上と人材育成に関する国際的な議論が展開された。本セッションは招待制の昼食会形式で行われ、ITUのボグダン＝マーティン事務総局長による開会挨拶に続き、パネルディスカッションが実施された。

日本からは今川総務審議官が登壇し、英国のJenny Bates氏（外務・英連邦・開発省）及び韓国のWoo Sung Jung氏（韓国科学創意財団）とともに、AIスキル向上に向けた各国の取組みを紹介した。今川総務審議官は、日

本がAI人材育成において重点を置いている施策として、AIギャップの解消を最優先課題に位置付けていることを強調。特に、AIによる言語の壁の克服が、地域間の格差是正とAIの均衡ある発展に資するとの見解を示した。これらの取組みは、日本政府が拠出金を通じて支援している国際的な施策とも連動しており、グローバルな連携の重要性が改めて確認された。

パネル後には、参加者間でのネットワーキングと円卓討議が行われ、AIスキルの普及に向けた具体的な協力の可能性について活発な意見交換がなされた。今後、AI Skills Coalitionを通じた国際的な連携が、包摂的かつ持続可能なAI人材育成の推進に寄与することが期待される。

■図2. AI Skills Coalitionパートナーズランチに登壇する今川総務審議官（右）

2.2 Robotics for Good Youth Challenge Grand Finale

7月8日から9日にかけて、AI for Good Global Summitの公式プログラムとして「Robotics for Good Youth Challenge Grand Finale 2025」が開催された。本大会は、AIとロボティクスを活用して災害対応などのグローバル課題に取り組むことを目的とし、世界19か国の予選を勝ち抜いた10～18歳の学生による39チームが参加した。競技は、災害対応を模したロボット競技形式で行われ、参加者は創造性と技術力を駆使して課題解決に挑んだ。日本政府は、本大会の開催にあたり、途上国からの参加者の渡航費支援を含む拠出金を通じて積極的に貢献しており、技術教育の国際的な格差是正に寄与している。

大会最終日の表彰式では、今川総務審議官が日本政府を代表して登壇し、すべての参加者に対し敬意を表した。今川総務審議官は、受賞チームへの祝辞に加え、「この大会は単なる競技ではなく、若い世代が互いに学び合い、限界に挑戦し、未来を創造する場である」と述べ、参加者の創造性、技術力、そして社会貢献への意欲を高く評価した。また、人口減少が進む社会において、ロボティクスは労働力を補完し、持続可能な未来の構築に不可欠な技術であると強調した。さらに、今川総務審議官は日本語の「匠（Takumi）」という言葉を紹介し、「技術を磨き続ける職人の精神が、今日の皆さんの取組みにも表れていた」と述べ、若き技術者たちへの期待を込めたメッセージを送った。日本政府は今後も、こうした国際的な人材育成の場を支援し、次世代のイノベーターたちの挑戦を後押ししていく方針である

■図3. 優勝したベネズエラチームを祝う尾上局長（左）、今川総務審議官（右）

2.3 AIガバナンスデー　閣僚ラウンドテーブル

サミット3日目にあたる7月10日には、閣僚級の政府関係者、国連機関の代表、企業のCxOレベルの幹部、学術界、市民社会など、約140名の多様なステークホルダーが参加する招待制の非公開セッションが昼食会形式で開催され、AIガバナンスをテーマに幅広い議論が展開された。我が国からは、今川総務審議官が参加した。

本セッションでは、参加者が20の円卓に分かれ、各テーブルには大臣級の政府関係者、規制当局、国連関係者、産業界、学術界、市民社会の代表が着席し、以下のような問いを中心に自由討議が行われた。

- AIの信頼性をいかに担保しつつ、イノベーションを促進するか
- 労働市場への影響にどのように備えるか

- 包摂的なAIガバナンスとは何か
- 国際的な協調体制は十分か、新たな枠組みが必要か
- AIの恩恵をすべての地域にどのように届けるか
- フロンティアAIに対する規制の在り方
- AIに対する懸念と期待のバランス

討議の後、各テーブルの議論結果は「AIと社会経済への影響」「国際協調」「AIインフラ」「標準とベストプラクティス」「安全性とリスク管理」「AIエージェント」などのテーマ別に報告され、各国政府代表が優先的に発言する形で共有された。

2.4　展示

約150の企業・研究機関・国際機関が参加する展示セクションが設けられ、AI技術の社会実装に向けた多様な取組みが紹介された。展示は、医療、教育、環境、公共安全、産業など幅広い分野にわたり、AIによる社会課題の解決をテーマに構成されており、来場者に対して実践的な知見と体験の機会を提供した。

日本からは、NTT、産業技術総合研究所（産総研）をはじめとする複数の企業・研究機関が出展し、先進的なAI活用事例を紹介した。NTTは、AIを用いたセキュリティ運用業務支援のためのレポート作成技術を展示。新人とベテランの暗黙知をAIに学習させることで、状況に応じた報告書を自動生成し、更に報告対象者に応じた文体や内容の書き分けも可能とする高度な自然言語処理技術を披露した。これにより、業務の効率化と品質の均質化を同時に実現する可能性が示された。産総研は、アザラシ型ロボット「パロ」を展示。パロは、触覚センサーや音声認識機能を備えた癒し効果のあるロボットであり、医療・福祉分野における心理的ケアの支援ツールとして国際的にも高い評価を受けている。来場者は実際にパロに触れながら、AIとロボティクスが人間の感情や健康に与える影響について理解を深める機会を得た。

3. おわりに

本フォーラムは、参加者数の増加を受けて、本年初めてPalexpoでの開催となったが、会場の広さに負けることなく、議論も展示も実に盛況であった。筆者にとっても「Robotics for Good Youth Challenge Grand Finale」は印象に残った。少年少女たちは、事前にプログラムしたロボットが思いどおりに動いた瞬間に歓喜し、予期せぬ挙動に悔しさをにじませる姿もあった。その隣の会場では、各国の閣僚や専門家がAIの未来と人類の課題について真剣に議論を交わしていた。年齢も国籍も立場も異なる人々が、同じ空間で「より良い未来」を目指している姿は、まさにWSISとAI for Goodの理念を体現していた。どこか文化祭のような熱気と、国際会議の重厚さが同居する空間は不思議な感動を呼び起こした。技術の進歩は、こうした多様な情熱の交差点から生まれるのだと、改めて実感した数日間であった。

ITUが注目しているホットトピックス

ITUのホームページでは、その時々のホットトピックスを“NEWS AND VIEWS”として掲載しています。まさに開催中の会合における合意事項、ITUが公開しているICT関連ツールキットの紹介等、旬なテーマを知ることができます。ぜひご覧ください。

https://www.itu.int/en/Pages/default.aspx